

国立 信州大学

プログラムの名称：個性の自立を《補い》《高める》学生支援
 -- 発達障害にも対応できる人間力向上支援プログラム

プログラム担当者：副学長 小坂 共榮

キーワード

- 1．発達障害 2．ニーズ把握 3．フィールド体験
 4．ライフスキル 5．ユニバーサルデザイン

1．大学の概要

信州大学は、人文・教育・経済・理学・医学・工学・農学・繊維の8学部からなり、すべての学部に大学院が設置されている。教員は約1,000人、在学生数は約11,000人で、うち留学生は約400人である。大学本部と人文・経済・理学・医学の4学部が松本市、教育学部と工学部が長野市、線維学部が上田市、南箕輪村に農学部が置かれている。いずれのキャンパスも山々に囲まれ、自然に恵まれている（写真1）。信州大学は、地域との連携がきわめて良好であり、地域に根ざした大学としての特色を発揮している。

教育方針としては、複雑化・情報化の時代にあって、豊かな教養と専門知識を元に自ら課題を見出し、それを解決できる能力を持った人材育成を目指している。また、自然を愛し、人類文化・思想の多様性を受容でき、国際的コミュニケーション能力をもって人間社会の共生、自然との調和を求める人材育成も目標としている。これらの目標を達成するため、創意工夫をこらしたカリキュラムを編成し、魅力ある充実した教育を行うよう努めている。

2．本プログラムの概要

本プログラムは、人間力向上に焦点を当て、発達障害等の専門的な支援ニーズの高い学生への支援までも実現するための取組である。これを全学で展開するために、既存の取組を再構成し、全学的組織である学生支援委員会において統括する。全1年次生に対して、質問紙・面接等により網羅的にニーズ把握を行い、自然に恵まれた本学ならではのフィールド体験による予防的、開発的プログラムも提供する。また、学生のニーズに応じて社会人としてのライフスキル（コミュニケーションスキル、対人関係スキル等）向上のためのプログラムを提供する。さらに個別的な支援を必要とする学生に対しては、修学支援、授業改善、医療相談、進路相談等を含む専門的支援が継続的に提供される。これらの連続的でユニバーサルデザイン化された支援システムは、多様な学生ニーズに応え、学生一人ひとりの潜在的な能力の開発と自己実現を目指すものである。



写真1 信州大学から北アルプスを望む

3. 本プログラムの趣旨・目的

本プログラムは、学生の支援ニーズの多様化を背景に、発達障害等これまで支援の対象にならなかった新しいニーズのある学生にも対応できるように、既存の学生支援の取組を再編し全学的組織の下で体系的な支援の実現を目指す(図1)。そのために信州大学の持つ自然豊かなフィールドも最大限に生かして包括的な学生支援プログラムを提供する。

具体的には、1) 質問紙や面接に加え、クラス担任等によって得られた情報を基に学生支援委員会が学生の支援ニーズを明らかにする。その結果は、2) ケース検討会議を経て、支援を必要とする個々の学生及び希望する学生に対して社会人としてのライフスキル(コミュニケーションスキル、対人関係スキル、自己管理スキル等)の習得を目指すプログラムへとつなげる。また、発達障害等の高いニーズを有するケースに対しては、支援チームの下、個別的な支援(カウンセリング、修学支援、進路相談等)が包括的に提供される。加えて全1年次生を対象にしたフィールド体験学習を行うことによって人間力育成を目指す、3) 学生へのより適切な支援を実現するために授業改善や関わり方のノウハウを含む教職員への支援提供を行う。

これらのユニバーサルデザイン化された連続的な支援システムは、多様な学生ニーズに応え、学生一人ひとりの潜在的な能力の開発と自己実現を可能にする。学生はピアサポーターとして包括的支援プログラムに参画し、教職員、学生が一体となった総合的な学生支援を行う。

4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

新しい発想や独自の創意工夫(他にない特色)

「早期支援のためのニーズ把握」から「発達障害のある学生への個別的支援」までを連続的に捉え、全学の資源を活用した組織的な支援体制の下に体系的な学生支援プログラムを展開している点は、他に類を見ない。個のニーズに応じた支援という特別支援教育の考え方を高等教育に応用する立場から支援プログラムを提供することにより、全ての学生が学びやすい教育環境の実現、すなわちユニバーサルデザイン化が図られる。

本プログラムで、具体的に独自の創意工夫が図られている点は以下の諸点である。

(i) ニーズ把握について

- ・メンタルヘルス上の問題に留まらず発達障害までも対象としている点。

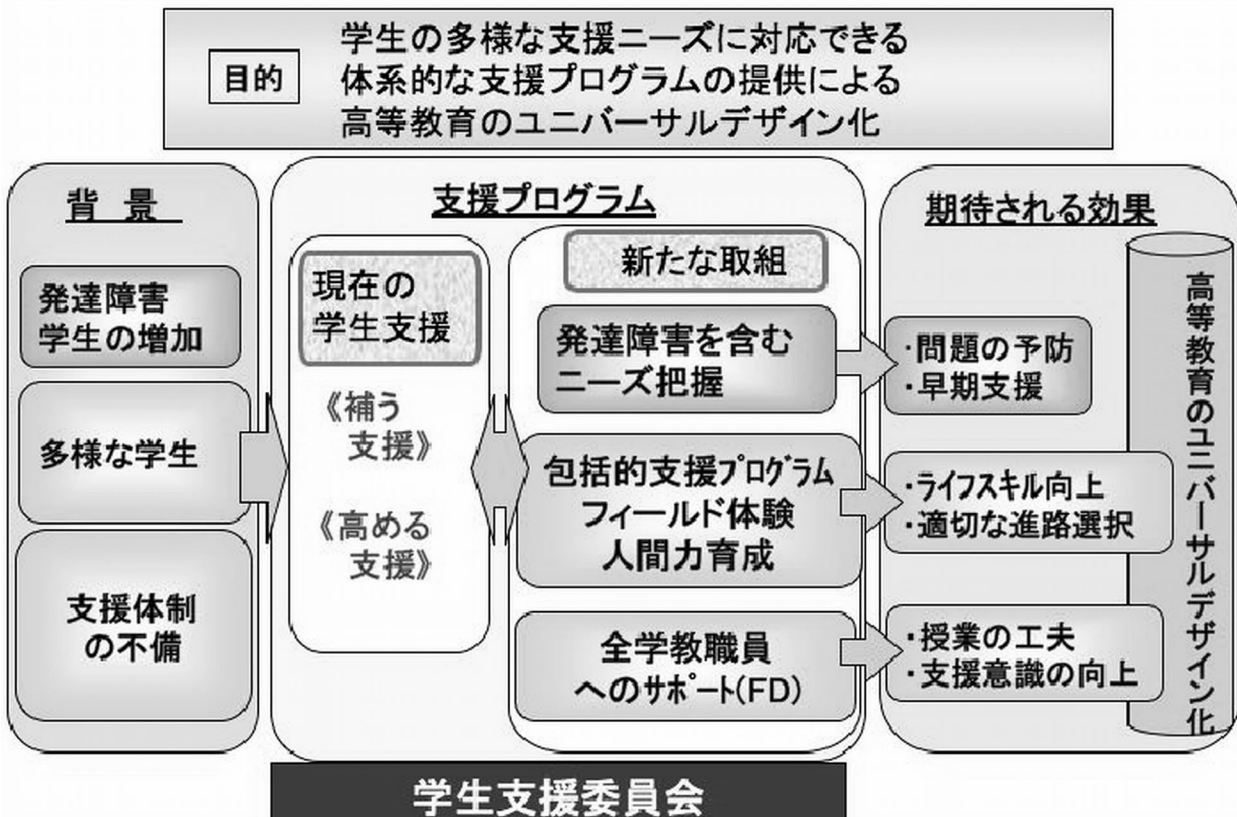


図1 本プログラムの概要

フィールド体験



八ヶ岳登山と森林浴



森林環境の整備、作業で汗をかく

農林業体験による人間力育成



動物の世話



寝食共の交流、友だちづくり
『同じ釜の飯を食う』

写真2 フィールド体験による人間力育成

- ・質問紙や行動観察など、多様な方法でニーズを把握する点。
 - (ii) ライフスキルの修得を目指した包括的なプログラムの開発・提供について
 - ・課題解決型ワークショップや信州の自然を生かしたフィールド体験実習等、通常の講義とは異なる形態を取り入れている点(写真2)。
 - ・これらのプログラムの実施においては、学生の潜在能力をピアサポートの形態で活用している点。
 - (iii) 学生支援コーディネータについて
 - ・多様な支援ニーズを持った学生が適切な支援を受けられるよう、新たに学生支援コーディネータを設けている点。
- ### 5. 本プログラムの有効性(効果)
- (1) この新たな取組を通じてどのような効果が期待されるか
 - (i) ニーズ把握について
 - ・早い段階で問題を把握し、早期対応することにより問題の深刻化が予防できる。
 - (ii) 包括的支援プログラムの開発・提供について
 - ・学生支援委員会を設置することで一元的な全学の支援体制が構築される。
 - ・学生のライフスキルに焦点化したワークショップは、発達障害のある学生ばかりでなく、全ての学生が自立した社会人としての基盤を形成する手助けとなる。
 - (iii) 学生支援コーディネータの設置について
 - ・学生が自身の支援ニーズにあった適切な支援を受けられるようになる。
 - ・複数の部署から支援を受けている学生については、全体的な支援の成果をコーディネータが評価することで、各部署間の調整を行うことができる。
 - (iv) 教職員への支援提供について
 - ・FD、SDを通し、学生の支援ニーズに対する教職員の感受性の向上により、学生の問題への早期対応が可能になり、問題の深刻化が防止できる。
 - ・学生への対応のノウハウを得ることによって授業改善が図られ、学生の授業に対する満足度が高まる。

- (2) この新たな取組は、現在の学生支援の取組との相乗効果が見込まれるものか
- ・発達障害をニーズ把握の観点に加えることで、現在行っているメンタルヘルス・スクリーニングでは把握できない学生への早期支援が可能になる。
 - ・単独で機能している既存の学生支援（修学支援、学生相談、就職支援、健康支援、課外活動支援、障害学生支援）をニーズ把握から包括的支援へと関連させ、一元化できる。
 - ・包括的支援により学生は自己理解が進み、長所を活かした進路選択が可能になる。
 - ・精神障害や対人関係の問題を抱える学生が、学生相談でのカウンセリングに加え、自立へ向けたスキル訓練を受けることができるようになる。
- (3) 社会的ニーズ・学生ニーズとどのように対応しているか
- ・高等教育における発達障害者への配慮が明記された「発達障害者支援法」の趣旨に合致している。
 - ・ライフスキルの習得による社会人力の向上は、調査の結果ニーズが高かった進路選択上の課題に応えることになる。
- (4) 教育活動や研究活動とどのような関連性があるか
- ・発達障害のある学生にとって学びやすい授業を教員が意識することにより、全ての学生が学びやすい学習環境が整備される。
 - ・ピアサポートプログラムの展開を通して、自主的自発的な学生の取組を支援、促進することになる。

6. 本プログラムの改善・評価

- (1) この新たな取組を実施した後、どのような体制や方法を用いて評価を行う予定か
- プログラムの評価の対象は、1) 早期支援のためのニーズ把握の状況、2) 包括的プログラムの機能状況、及び3) 教職員の支援提供の状況である。これらの取組の評価は、学生支援委員会が計画・実施する。具体的な方法として、調査による量的データ、面接・観察から得られる質的データを収集・分析し、これらをデータベースとして蓄積し、各年次に公表する。また、教職員は自分の支援状況について所属組織に報告し、学生支援委員会はその報告を取りまとめる。
- 学生支援委員会は、2年ごとにプロジェクト全体の総括的評価を行う。学生相談、障害学生支援、発達障

害者支援等の各領域の専門家から成る外部評価委員会は、本プログラムの有効性と限界を、外部の客観的視点から明らかにする。

- (2) この新たな取組を実施した後、どのような観点について評価を行う予定か
- 評価の観点は次の通りである。
- (i) 早期支援のためのニーズ把握に伴う評価の観点
- ・ニーズ把握のための各ライフスキル項目の設定は適切か。
 - ・ニーズ把握の時期は適切か。
- (ii) 包括的プログラムに対する評価の観点
- ・ライフスキルは向上したか、行動上の問題の改善は見られたか。
 - ・精神的健康度、社会的参加意欲、学習意欲は向上したか。
- (iii) 教職員の支援提供に対する評価の観点
- ・教職員向けワークショップ参加者の満足度。
 - ・授業に対する学生評価の変化。

- (3) 評価結果についてどのように活用していくか
- 評価結果を教職員に周知し、教員個人としての学生支援活動の向上に役立たせる。また評価結果は学生支援委員会の次年度の活動方針と実施手順の見直しに反映させる。取組全体の問題点、それに対処するための解決法、解決法の機能状況の3点について、学外の機関に情報提供を行う。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

- (1) 年度ごとの計画

図2に示すように、2007（平成19）年度に準備を進め、2008（平成20）年度以降にプログラムの種類、対象学生を順次拡大する形で、2009（平成21）年度に支援体制の確立を目指す。

- (2) 実施組織

図3に示すように、学生支援を統括する学生支援委員会を新たに設ける。学生支援委員会の中には、実際の支援プログラムを展開する、発達障害支援部門、健康管理支援部門、フィールド体験部門、人間力育成部門を設ける。また、新設の学生支援コーディネータは、学生の窓口となり、ニーズの把握、支援計画の作成、支援プログラムの紹介、学外専門機関との連携、環境調整、支援効果の評価、支援計画の修正、ピアサポー

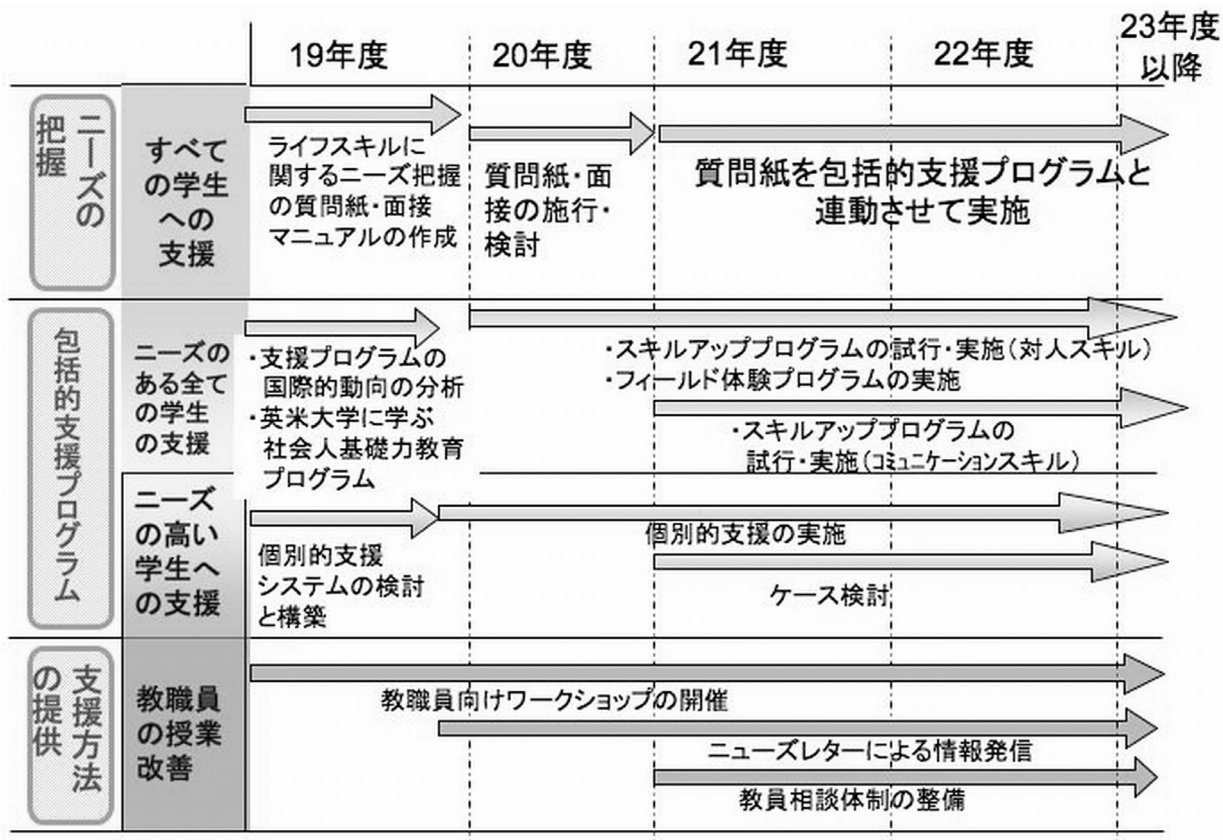


図2 年度ごとの事業計画

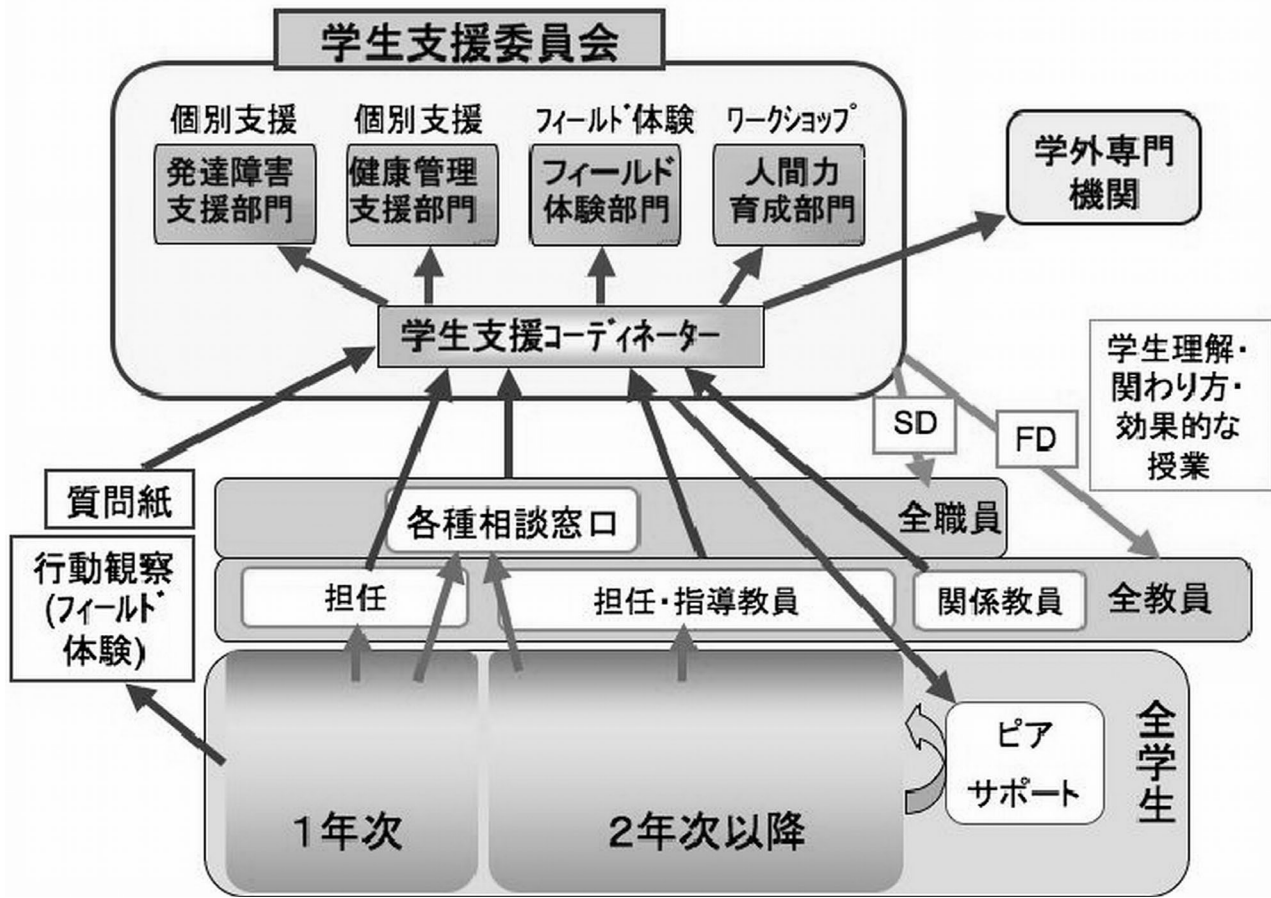


図3 実施組織

事例12 信州大学

トプログラムの展開などを行う。

させ、プロジェクト全体の見直しを行う。

- ・発達支援センターの構想につなげ、地域における学生支援のセンター的役割を目指す。

(3) 将来性

- ・2008(平成20)年度の間接総括を新中期計画に反映

選 定 理 由

信州大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を長年にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、大きな成果を上げていると言えます。

また、今回申請のあった、発達障害等の専門的な支援ニーズの高い学生までを含む総合的な学生支援の取組は、発達障害学生への支援、修学に困難を抱えている学生への支援などに関し、その把握から大きな解決に導くまで、それぞれの支援のプロセスが明確であり、また、他の学生支援との一体化、実施体制の一体化などに見られるように体系的であり、他に見られない工夫ある取組であると言えます。

特に、発達障害学生への支援の取組にあっては、多くの学生がメンタルヘルス面で潜在的に問題を抱え、さらに発達障害の学生もいるという想定に立って対応し、早期発見、早期対応・支援、そして、そうした支援教育を通して全学生の人間的成長の向上を目指す取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。

発達障害学生への取組には、組織体制と知的資源が重要ですので、それらの充実を通して優れた成果を期待します。